

家族を考える —家族の分析視点と家族イメージ—

飯 塚 由 美
(教育心理研究室)

A Consideration of Modern Families:
Understanding of Family Analysis Points and the Family Image

Yumi IITSUKA

キーワード：家族システム 家族関係 家族イメージ

I. はじめに

種々の家族評価がシステム論的思考に影響され検討されている。家族臨床など治療の最前線では、このシステム論を基礎理論として療法を展開し、効果の実績を積んでいる。また家族社会学では家族ライフ・ステージとのかかわりや家族に関する理論構築の枠組みの中でシステム論が論議され、派生する多くの仮説・理論を生んでいる。たとえば、Olson, D.H. が提唱した家族システム円環モデル (Circumflex Model) は、家族システム機能を2次元、凝集性 (絆: cohesion) と 適合性 (かじとり: adaptability) によって評価するもので、これらはカーブリニアな関係にあると仮定される。つまり2つの次元が中程度のバランスのとれた状態の時に、その家族機能が最適となり、両極に位置すると機能的に不全となる。これに準拠した家族システム臨床評価尺度 (Clinical Rating Scale)、模擬的家族活動測定法 (Simulated Family Activity Measurement)、Face (Family Adaptability

and Cohesion Evaluation Scale)、FACESKG IV (立木ら, 2001) があり、現在もその妥当性、信頼性の検証が行われ、適切な評価尺度の確立のための努力がなされている。

本稿では、まず現代家族の捉え方に多大な影響を与え、パラダイム変換することとなったシステム的思考の根本基盤について紹介する。これについては、今後、自己の家族研究の方向の指針として、「家族」を考える一助となるであろう。

また、「家族とは？」という問いかけの中で、家族イメージや回答者から得られた素朴な家族観のデータを整理し、現在の家族に対する意識を分析、家族再考のための資料とする。なお、本稿の末尾に、資料データの一部を掲載しておく。

II. 現代家族に関するパラダイムとその分析視点

1. 家族システム論のキーワード

家族システム論では、人間はある部分では、人々

を互いに引きつける情動過程に基づく集団の中で生きているとみる。さらに、この集団過程は情動システムに根ざしており、その強さは、個性性と一体性の相互作用に顕著に左右される。集団によってその親密さはさまざまであるが、このような情動に基づく集団過程は、まとまりだけでなく葛藤をも生み、また他の人たちの機能よりも、特定成員の機能が有利になるという可能性がある。その一方では、集団の一人の成員が機能障害に陥った時には、集団の傾向は、集団過程の影響を最小にしたり、あるいは否認したり、また機能障害を持つその人の悪いところに焦点を当てることとなる (Kerr & Bowen, 1988)。

通常、家族は、家族を取り巻く社会状況の変化 (経済状況含む)、家族成員の変化 (単身赴任、出産による生活変化、疾病等) をうまく乗り越え、適切に対応し、家族自体も変化する。そのシステムとしての特性を以下にあげる。

1) 循環する因果関係

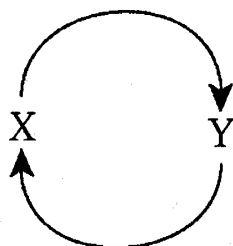
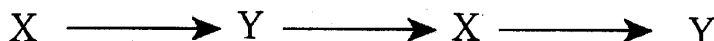
人は他の人が考え、感じ、話し、行動すること、に、情動的、感情的および主観的レベルで影響を受け、また他の人が考え、感じ、話し、行動するであろうと想像したものから影響を受ける。家族システムとは関係を制御する情動過程についての理論である (Kerr & Bowen, 1988)。

家族システムでの因果関係の解釈は、線形であるよりむしろ循環すると見られている。つまり、基本的に新しいシステムパラダイムは、たとえば、Roberts (1994) が用いた Fig. 1 に示されるように、X と Y が互いに両方の先行要因であるという点で、因果関係の回帰的、あるいは循環的見方を仮定する。従来考えられていた原因と効果の単一方向モデル (unidirectional model) の (a) から、循環するモデル (b) へのシフトである (Bateson, 1970)。たとえば、日常起こり得るだろう (c) の状況では、父親の飲

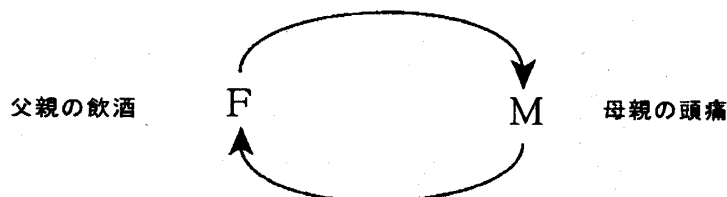
(a) 線形因果関係 (linear causality)



(b) 循環的因果関係 (circular causality)



(c) 循環的家族因果関係 (circular family causality)



父親の飲酒と母親の頭痛が相互に原因となる

Fig. 1 線形因果関係と循環的因果関係 (Roberts, T. W., 1994)

酒も母親の頭痛も双方が原因となり循環する。システム論では、どんな家族メンバーの行動でも他の家族メンバーの行動と関係がある。

ただ、現実的に家族が組み込まれている、より大きな社会システムを考慮するとき、この複雑さは想像以上に増大し、相互作用の回帰的な性質の複雑さという条件のもとでは、どんな出来事の結果でも予測することが難しいとされる (Becvar & Becvar, 1988)。すべての関係は特定の社会および文化的なセッティングの中にはめ込まれていると考えられており、いつも外界との関連性を念頭におかねばならない。

現在、複雑に外界とリンクする関係について相互作用的過程の1つのサイドに焦点を合わせることによって、その複雑さをより単純化しようと多くの理論家が試みている。Kerr と Bowen (1988) によれば、小集団でもこの過程はきわめて複雑であるため、まず二者関係という「単純な」システムでの関係過程に影響を与える個性と一体性について議論の焦点を当てることは有益であろうと提起している。しかしながら、二者の関係に焦点を当てるだけで、事が終結するほど簡単ではなく、結局、より複雑で、全体の社会的ネットワークがシステム内の人物の行動に寄与するものとして分析され、理解されなくてはならない。各部分ごとの知識が相互に関連するダイナミックな全体を推測できるのか。この点で、現在もなお家族システムとして研究する上で、変化する全体を把握する決定的な分析ツールの欠落というジレンマとなっていることは確かである。

2) 家族ホメオスタシス

関係の均衡は静的ではなく力動的な平衡状態である。システム論的な家族の捉え方では、一般システム理論の特徴であるホメオスタシスが重要なキー概念となる。ホメオスタシス仮説では、システムは連続的フィードバックループを通して環境を含む情報を交換し、システムへの頻繁な内的、外的変化に対し、基本的にシステムが安定性を維持しようと試みると考える。つまり、ダイナミックで、絶えず変化するホメオスタシスの過程が、システム内に大きな危機的状态を起こさないよう、情報を制御下の環境から

隔離したり、あるいはシステム自身を順応的に変化させる。

たとえば、子どもの問題行動は、その子ども自身の独立的な行動というよりむしろ、家族内の相互作用パターンの結果として生じるとされる。すなわち、これはシステム内のフィードバックループのエスカレーションを意味しており、均衡への回帰の必要性のサインを出している可能性がある (Roberts, 1994)。このホメオスタシスはライフサイクルを通して (Carter & McGoldrick, 1989)、おとなの発達と同様、Piaget (1926) にみられるように、多くの子どもの発達理論にも用いられている。

3) 家族コミュニケーションとフィードバック

家族については、フィードバックループを通じたコミュニケーションの重要性とその情報プロセスが認識されている (Watzlawick, Bavelas, & Jackson, 1967)。家族のコミュニケーションは家族システム内で、言語的、非言語的双方の相互作用を通して連続的に起こっている。その際、フィードバックループは、この相互作用が生起し、維持されるメカニズムに関係しているとされ、家族がシステムをモニタリング (監視) し、適応をする際、そのホメオスタシスを維持するメカニズムであるとされる (Goldenberg & Goldenberg, 1991)。このフィードバックループは、システムを安定した、しかし変化が可能な状態に保とうとする。つまり、家族システム内ではフィードバックループの主たる機能は、自己 - 調整的であるが、システムは決して静的でなく、むしろ必要に応じて変化し、順応が可能であることで、システム自身を維持することになる。

通常、フィードバックには、ネガティブ、ポジティブの2つのタイプが仮定されている。ネガティブフィードバックは、インプットを鈍らせ、変化の可能性を減少させ、均衡に戻る傾向がある。ポジティブフィードバックは、最初のインプットを増幅して、システムをいっそう速く変化させる (Constantine, 1986)。これらのフィードバックは家族に次の2つの必要な機能を供する。均衡を維持するために機能するループと変化を促進するよう機能するループである。たとえば、就寝や、TVを見、歯を磨くこ

どのような毎日の活動は定期的に存在するフィードバックループを通してモニターされ、これらの自動的な活動がいつものように起こる限り、あまり多くの注意がそれらに向けられないのである (Roberts, 1994)。

4) 変化と順応性の不断のプロセス

機能的なシステムというのは、安定性と変化の両方によって特徴づけられ、この安定性と変化の間の不断のダイナミックな緊張の中で機能するとされる。時に家族員の病気や、移動 (単身赴任、転出など)、経済難や、その他、家族の予期せぬ変化が起こり、家族構造の再編成を強いることになるが、この局面に適切に立ち向かい、対応する必要が生じてくる。特に、家族ライフサイクルでの移行の期間は、注意すべき時期であり、適時、反応を変化させなければならない状況にあるとされる。家族が新しい状態を経験しているとき、つまり、1つのライフ・ステージから別のステージへ移行するようなとき、家族が適切に反応するコントロール機能はより強化される必要がある。変化と順応という連続的なプロセスを経て、家族が安定的に継続、発展していく。

Ⅲ. 家族とは—素朴な家族イメージが示すもの

1. 家族のイメージ調査

専門的で深い家族分析による家族の捉え方とは別に、一般の人々の視点から、実際に、家族をどう考えているか、素朴な家族イメージ (2003 年—2004 年) として、現代家族を理解するための手がかりを紹介しておこう。協力者は、女性 100 名 (短大保育科 2 年)。「家族とは・・・」というテーマで、自分の考える家族のイメージをできるかぎり提示してもらった。資料の一部を一覧表として本稿末尾に添付してある。

2. 結果の整理

家族について収集された資料データは、その表現が含む単語を一つ一つ拾い上げる方法で整理し、後に主観的クラスターにより分類を試みた (Table.1, Fig.2)。個々のカテゴリーは従来の家族関係の文献や自己の先行研究の結果を参考にしている。

総合的にみて、家族をイメージする場合、家族の情動的機能面を表現する記述が多く提示される。基

本的情動としてあげた愛着の要素や結びつきを重点とする情動的紐帯、血縁的紐帯、家族成員相互の助け合いや支えあいなどの相互依存性、成員間のコミュニケーション特性に関連する開放性・直接性等、さらに、成員間の関係の質に関連する信頼性・信用性、成員同士の分離不能な感覚、一体感・ユニット性、共行動性などがあげられる。また生活、住むなどの生活基盤としての家族イメージ表現がしばしば提示されている。興味深いのは、家族イメージの中に「場所としての感覚」が広く存在していることにある。これは「家庭」と「家族」のイメージの混合が招いているとも考えられるが、居住環境に関する愛着について、近年、人と環境との心理的かかわりのひとつである「場所への愛着 (place attachment)」の概念が提出されている (大谷, 2001)。この報告では、まず、高齢者と就業成人を対象に実施した家および地域への愛着項目の認知的・情動的・行動的の各成分の探索的因子分析の結果をもとに、構造モデルを作成している。また、共分散構造分析により 2 次的検証的因子分析を実施、Amos4.0 を使い、最適モデルを選定している。結果的に家に対する愛着として、「機能性」「関与性」の 2 因子 (認知的成分)、「永住意向」(行動的成分) を見出している。さらに、情動的成分では、高齢者で、「投影性」(所属・所有感、時間的経緯、セルフ・アイデンティティが揮然一体となったもの)、「生活基盤性」(家が生活の基盤であるという実際の次元) に分け、就業成人では、「日常生活性」(所有やシェルター) と、「人生基盤性」(誇りや基盤といった日常超越的な情動) を提示し、調査対象者双方で違いを見せている。

一般に受容される『素朴』な家族観からすれば、「家族」には、構成する成員とのかかわりや相互作用の質といった人間関係のイメージと居住する場としてのイメージが分離されず一体となった形で認識されている。まさにおおらかで全体的に家族を認識しようとする「家族観」であるようにみえる。専門的に特化、ある部分に集約された極めて分析的な家族評価とはかなりかけはなれているのかもしれない。

通常、家族は絶えずその構成や構造、また心理的、情動的関係において動いており、時間経過をたどれ

ば、いつも変わらぬ、不変のものではない。

家族の安定感は、例えるなら、水面のある一定の位置に留まる水鳥たちの様相にも似ている。川の流れの中で、ゆったりと優雅に落ち着いた鳥たちの姿からは想像しにくい、ここにとどまるためには、水面下で連続的にせわしく足さばきをする行為がなければならない。一見安定し、常態の相にとどまっているように感じるのは、多くの家族構成員の認知

的傾向性であろう。家族に対するわれわれのイメージは、客観的、分析的というより極めて情動的で全体的感覚を有しており、家族の継続・存続に関しては、家族に対する普遍的な安定性の知覚や、変わらない愛情的絆と落ち着き、常時安心できる場、こうした多面的で統合的な安定の感覚が今後も各メンバーに保たれること（期待を含む）がやはり重要ではないだろうか。

Table.1 家族に対するイメージ・表現の主観的クラスター (total:433)

提示されたイメージ・表現		提示されたイメージ・表現	
基本的情動（愛着）	a1 温かい	信頼・信用性	h1 信頼
	a2 ぬくもり		h2 頼り（頼れる）
	a3 安心		h3 信用できる
	a4 安らげる（安らぐ）		h4 裏切らない
	a5 落ち着く	分離不能感	i1 大切
非虚飾性	b1 ありのまま		i2 欠けることできない
	b2 素のまま（素）		i3 切れない
	b3 自分らしくいられる		i4 切り離せない
	b4 自然体		i5 なくてはならない
	b5 リラックス		i6 かけがえのない
情動的紐帯	c1 絆		i7 いるのが当たり前
	c2 心（気持ち）のつながり		i8 身近
	c3 つながっている	一体感・ユニット性	j1 集団
	c4 愛、愛情で結ばれた		j2 集まり
相互依存性	d1 助け合う		j3 まとまり
	d2 助けてくれる	共行動	k1 一緒にいる
	d3 支え合う		k2 一緒に～する
	d4 支え（支えてくれる）		k3 共に～する
	d5 協力する	血縁的紐帯	l1 血のつながり
思いやり・無条件の関心	e1 思いやる		l2 血縁
	e2 心配する	非血縁的紐帯	m1 血のつながり以上
	e3 親身		m2 精神的なものの重視
開放性・直接性	f1 本音が言える	生活基盤	n1 生活する（共にする）
	f2 仲直りできる		n2 暮らす
	f3 ストレート		n3 住む
	f4 感情共に（分かち合う）		n4 育つ（育てられる）
相談（話ができる）	g1 相談できる（悩み等）	場への愛着 (place-attachment)	o1 場所
	g2 話せる		o2 場
			o3 帰るところ（最後に）

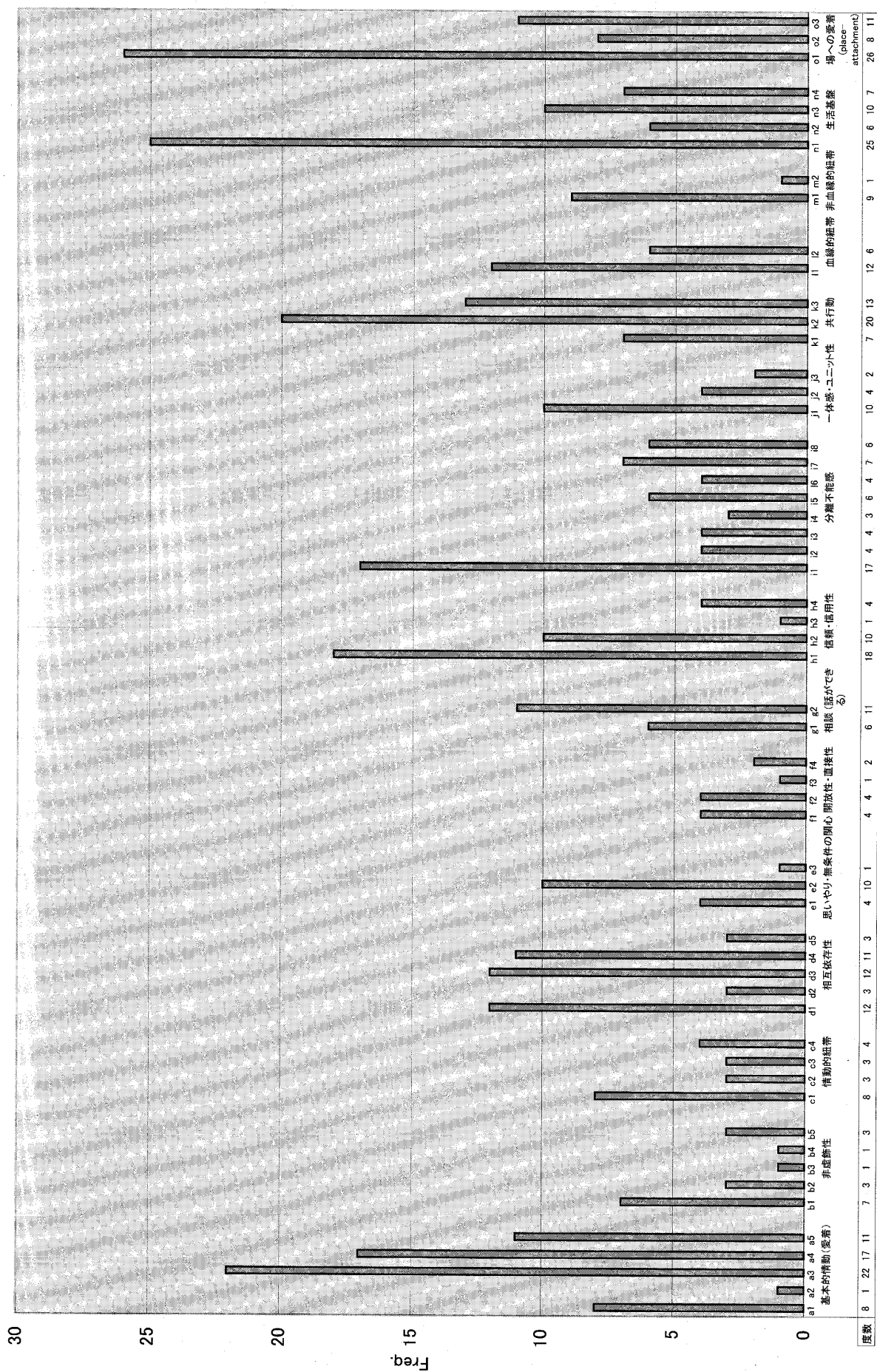


Fig.2 家族とは

引用文献

- Carter, E.A., McGoldrick, M. (Eds.) 1988 The changing family life cycle : A Framework for Family therapy. New York: Gardner Press.
- Constantine, L.L. 1986 Family paradigms: The practice of theory in family therapy. New York: Guilford Press.
- 大谷 華 2001 日本心理学会第 65 回大会発表論文集, p 836.
- Roberts, W.T. 1994 A systems Perspective of Parenting: The Individual, the Family, and the Social Network. California: Brooks/Cole.
- Kerr, M.E. & Bowen, M. 1988 Family Evaluation: An Approach Based on Bowen Theory. (藤縄 昭 他監訳 2001 『家族評価 ボーエンによる家族探求の旅』 金剛出版)
- 立木茂雄 1999 『家族システムの理論的・実証的研究』 川島書店
- Watzlawick, P., Bavelas, J.B., & Jackson, D. 1967 Pragmatics of human communication : a study of interactional patterns, pathologies , and paradoxes. New York: Norton.
- Watzlawick, P., Weakland, J., & Fisch, R. 1974 Change:

Principles of problem formation and problem solution. New York: Norton.

参考文献

- Eschleman, J.R. 1994 The Family: An Introduction 7th ed. 5Boston: Allyn & Bacon.
- Hoffman, Lynn 1983 Foundations of family therapy . (亀口憲治訳 1986 『システムと進化 : 家族療法の基礎理論』 1986 朝日出版社)
- Nichols, M.P., Schwartz, R.C. 1998 Family therapy: Concepts and Methods. Boston : Allyn & Bacon.
- 亀口憲治 1992 『家族システムの心理学』 北大路書房
- 飯塚由美 1999 家族関係の時間的変化と家族の布置との関連, 島根県立島根女子短期大学紀要, 第 37 号, p71 ~ 80.
- Iitsuka, Y. 1998 Changes in family relationships and close networks. XXVI International Congress of Psychology. International Journal of Psychology, p321.
- 飯塚由美 1987 家族に関する社会心理的研究 : 家族に対する親密さと満足, 関西大学大学院 「人間科学」 第 28 号, p37 ~ 48.

(平成 16 年 10 月 29 日受理)

資料 1 家族とは

(一部掲載)

no.	提示順位	提示されたイメージ・表現	no.	提示順位	提示されたイメージ・表現
1	1	離れていても見守っているような安心感が感じられる	14	1	ありのままの自分でいられる
2	2	相手のことを信頼している	2	2	安らげる
1	1	自分が自分らしくいられる場所	15	3	自分のことをよくわかってくれる人
2	2	絆がととも強く、死ぬまでつながっている	1	1	愛を一番最初に感じられる場所
3	3	心の安全基地	2	2	いろいろな形がある
4	4	助け合っているもの	3	3	温かい場所
5	5	安らげる人たち	4	4	最終的に帰れる場所
3	1	共に生活する集団	16	1	一番落ち着ける居場所
2	2	本音をぶつけられる相手	2	2	簡単に切れる関係ではない
3	3	喜怒哀楽をストレートに表すことができる相手	3	3	目に見えないつながりがある
4	1	家族全員が一番心が休まる場所	4	4	血のつながりや人から見てどうかには関係ない
2	2	外から帰ってきてホッとする場所 (人)	17	1	精神的に安心感や安らぎを持てる場所
5	1	安らげる場所	2	2	どんな時も味方でいてくれる
1	1	リラックスできる場所	3	3	行き詰まった時は助言をしてくれる
2	2	本音をぶつけられる存在	4	4	面倒を見たり、一緒にいて、守ってあげたいと思う存在
3	3	たとえ血がつながっていないなくても互いを思いやる存在	18	1	支え合えないがら生活を共にしていくもの
4	4	一緒に生活している人	2	2	つらい時に助け合える
6	1	自分が素でいられる	3	3	なくてはならないもの
7	1	血のつながりがなくても血のつながりがある人	4	4	切っても切り離せないもの
2	2	一緒に生活している人	5	5	一番人間性が見られる
3	3	その人が家族と思えばだれでも家族	6	6	憩いの場 (存在)
8	1	安心できる存在	7	7	信頼できる場 (存在)
1	1	いなくはない人たち	19	1	ありのままの自分をずっと続けてくれる人
2	2	自分のことを考えてくれる人	2	2	どんなことがあっても話を黙って聞いてくれる
3	3	自分のことをよく知っている人	3	3	自分をわかってくれる
4	4	一緒に家に住んでいなくても互いに頼りにし、信頼を寄せている人たち	4	4	とても落ち着く場
9	1	温かい感じがする	5	5	自分にとってもとても大切
2	2	何があっても最後まで信用できる	6	6	ずっと愛しているもの
3	3	お互いのことを理解している	20	1	安らぎ
4	4	自分の支えとなる	2	2	支え合い
1	1	安らぎを与えてくれ、癒してくれる	3	3	よき理解者
2	2	ぬくもりを感じる	4	4	絶対的信頼
3	3	血がつながっている	5	5	深い絆
4	4	何か悩みごとがあったら相談ののってくれたり助けてくれる	6	6	尊敬し合える
5	5	信頼できる	21	1	同じ家に住んでいる血縁関係のある人
6	6	自分を一番心配してくれる	22	1	親子間に尊敬がある
7	7	互いの性格を一番よく知っている	2	2	お互い頼り合っている
11	1	顔を見ただけで何となく安心する	23	1	温かいイメージ
2	2	落ち着く	2	2	自分とは切り離せない存在
3	3	うれしいことはみんな嬉しむ	3	3	社会生活の最小単位
4	4	何人いても一つの集団	24	1	遠慮のいらぬ場所
5	5	何でも話せる仲	2	2	遠慮のいらぬ関係
1	1	いろんな悩みも相談できる	3	3	相談をしてくれる人
2	2	いつでも帰ることができる場所	1	1	互いに支え合い援助しあっている人たち
3	3	自分をそのまま出せる	25	2	家族の形は様々
4	4	何も気を使わずに素のままの自分でいられる場所 (家族全員)	2	2	血縁者からなる集団
13	1	何かいい雰囲気	1	1	絆みたいなのでも結ばれた人同士が共同生活をしている
2	2	いざというときとても頼りになる	2	2	離れていてもその人のことを心配したりすることが出来る関係
3	3		27	1	一緒に住む人たち

no.	提示順位	提示されたイメージ・表現	no.	提示順位	提示されたイメージ・表現
28	1	自分の居場所がある	40	1	一番安心できる
	2	温かい場所		2	よいところも悪いところもすべてさらけ出せる
	3	自分を本当に理解してくれる存在		3	血のつながりは関係ない
29	4	奥が深い	41	1	信頼できる
	1	血のつながりは関係なく、心がつながり互いに許し合い認めあう関係		2	温かい
	2	気取らずに自分があるのまますし切れる		3	かけがえのないもの
30	3	安らげる場		4	沈黙の中でも安心感を感じる
	1	話ことやうれしいことを一緒に喜んでくれる		5	血がつながってなくても、一緒に暮らし、大事にし合える関係
	2	つらいこと悲しいことがあるとそばで支えてくれる	42	1	一番自分の存在を理解し、受け止めてくれる
	3	心配してくれる		2	自分の居場所
	4	人に話せないことでも何でも話をする事ができる		3	誰一人欠けることができない大切な人たち
	5	くつろいだりリラックスできる空間		4	うれしさ、悲しみを共に感じてくれる
	6	生活を支えてくれる		5	心から心配し合う
31	1	どんな時も味方でいてくれる		6	温かい
	2	話を聞いてくれる	43	1	その日にあった出来事を毎日話し、何でも言い合える仲
	3	自分のことを心配してくれる		2	何があっても一緒にいる仲間
	4	厳しい目	44	1	ともに生活したり過ごしたりしている集団
	5	わがままや弱音と言える		2	心の絆で結ばれている
32	1	苦楽を共にしてつながりが深まっていくもの		3	落ち着ける場
	2	本心をぶつけられるようになってから家族だと思える		4	自分を全部さらけ出せる
33	1	自分にとってかけがえのない大切なもの		5	ありのままを受け止めてくれる
	2	つらい時悲しい時うれしい時、必ず声を聞き伝えたいくなる		6	他人に言えないことも家族には言える
	3	不思議に落ち着く		7	かけがえのない大切な存在
	4	温かさ	45	1	いることが当たり前前になっっているが、とても心強い存在
	5	速く離れていてもつながっている		2	同じ空間で生活を共にする時間が長い分、信頼感、きずなが強い集団
	6	切り離すことが絶対にできない存在	46	1	一緒に暮らしている
34	1	安心できる場所、空間		2	自分が一番自然でいられる集団
	2	会話や生活を共にすることで愛着や安心感ももてる		3	一番信頼できる集団
	3	つらいとき励ましてくれる		4	自分がどんな状況になっても帰れるところ
	4	血がつながっている		5	一番大切な存在
	5	顔や性格が似ている	47	1	何でも言い合える
35	1	いろいろな家族があり肉親や肉親以外の関係		2	本気でけんかする
	2	安心して頼りにできる関係		3	安心できて安らぐ存在
	3	一番身近な関係		4	面白おかしい家族
	4	衣・食・住を共にする		5	何かあったときにすぐに話を聞いて助けてくれる存在
36	1	とても大切な存在		6	ずっと一生付き合っていく人たち
	2	一緒にいて気を使わない		7	恥ずかしい部分をみせることができる
	3	落ち着ける存在		8	一緒に家に住んでいて
	4	何でも言い合うことができるもの	48	1	一緒にいて安心できる
	5	けんかをして自然と仲直りできるもの		2	速慮なく何でも言い合える存在
37	1	全員で支え合い協力しながら一緒に暮らしている集団		3	一緒にいて安心できる
	2	気を使わず落ち着ける場		4	大切にしたい
	3	互いに信頼し合い大切に一緒に生活していくもの		5	そばにいてのが当たり前
38	1	一緒に住んでいる		6	悩みを聞いてくれ自分のことを考えてくれる
	2	家族の前だと本当のことを言える		7	気兼ねしないですっきりと言ってくれる
39	1	みんな仲が良く、家の中から笑い声が聞こえる感じ		8	甘えられる存在
	2	一人がうれしい思いをしていたらみんなが励ます			
	3	お互いがお互いのことをよく理解している			
	4	お互いを支え合いながら生活している			

no.	提示順位	提示されたイメージ・表現	no.	提示順位	提示されたイメージ・表現
51	1	なくてはならない存在	62	1	血がながっていて、役割分担がある
	2	心の支えになってくれる		2	一緒に暮らしている
52	3	何があっても切れない縁で結ばれている		3	血のつながりなくとも気持ちがつながっていれば家族
	1	一緒に住んでいる人		4	社会的、経済的に互いに支え合っている
53	2	一緒に住んでいなくても血がつながっている人		5	心を許せる安心できる集団
	3	家族だから生活を支えてくれる	63	1	一緒に生活をし、互いが信頼関係に結ばれている
	1	毎日生活を共にする		2	かけがえのないもの
	2	裏切らない		3	ともに何かを経験し学び、見守ってもらえる存在
	3	信頼できる		4	つらいこと苦しいことがあったとき安心できる存在
54	4	心から心配し助け合う		5	互いに怒りをぶつけ合っても許しあえる存在
	5	他人と違う心情、思いやりがある	64	1	血縁関係がある
	6	血のつながった人のまとまり		2	互いによく理解しあっている
	7	家族の代表が養い生活する		3	愛情による結びつきが強い
	1	血縁関係がある		4	思いやり
	2	同じ家に住んでいる		5	助け合い
	3	心を許す		6	離れて暮らすと気がかり
	4	安心できる		7	人数や雰囲気は変化する
55	5	支え合い	65	1	何があっても最終的に頼りになり帰る場所
	6	気を使わず一緒にいられる存在		2	互いに何かを求めてしまう
	1	ケンカしても次の日普通に会話できる	66	1	自分と他人の中間
	2	安心できる		2	切っても切れない
	3	安んずる		3	会話がなくても困らない
	4	頼れる		4	一緒にいて楽で安心する
56	1	親族の一部が同じ場所とともに生活をしていくもの		5	無条件に大切に想う
	2	離れていてもその関係が変わらない	67	1	柱になる存在
	3	次の世代につなげていくもの		2	支え
	4	頼り頼られるもの		3	家族を一塊として、そこから人間関係が広がっていく
	5	素をみせることのできる場所		4	安らぎの場
	6	自分の原点		5	本音で言い合える
57	1	毎日一緒にいるのが当たり前な存在		6	甘えが許される人たち
	2	頼れる存在		7	初めて経験する仲間 (社会)
58	1	一つ屋根で暮らす一つのまとまり		1	血がながっている
	2	食事やくつろぐ空間を共有している		2	互いを信頼している
	3	時に協力し合える関係		3	深い絆で結ばれている
	4	血のつながりは関係ない		4	ありのままの姿を出せる
59	1	自分の気持ちを伝える場		5	かけがえのない存在
	2	わがままが言える所		6	一番落ち着け、安心ができる場所 (存在)
	3	困ったとき力になったり相談したりできる		7	いつでも帰れるところ
	4	安全地帯		8	何でも相談できる
60	1	互いの絆がとて強い		9	一番甘えられる存在
	2	それぞれ大切に思っている		10	育ててくれたもの
	3	一緒にいると気持ちが温かくなる関係		11	一番身近な存在
	4	血縁的なものより精神的なものに重心		12	温かい
	5	互いに支え合える存在		13	本気で心配してくれる
	6	欠けてしまうといけない大切な存在		14	きちんと叱ってくれる
61	1	一緒に生活することで互いの存在を認め合う人々の集まり		15	裏切らない存在
	2	血のつながり以上に信頼しあえる絆のある人々が本家の家族		16	頼れる存在
	3	心の安らげる場所		1	温かくて居心地のいい場所
	4	なくてはならないもの		2	何があっても受け入れてくれる存在